

2ちゃんねるにおける アンカーの議論発散傾向と議論深化傾向

武田 拓也

本研究では、2ちゃんねるのスレッドを対象に、2ちゃんねるにおけるコミュニケーションを量的特性やネットワーク構造の側面での分析を行う。

特に、言語的側面ではなく、投稿行動(発言数および返信数)の面に注目する。また、議論の過程は、話題の性質に依存すると考える。

また、スレッドを消費していく中での投稿者やアンカーの多様度数などの変化にも着目し、分析を行う。

2ちゃんねるの議論において、コミュニケーションの量的な変化を捉えることで、スレッドの炎上や、フレーミングなどの対応に応じた仕組みを考えるのには、投稿者の多様性を明らかにし、ジャンルごとに区別することでの基本的な状況を知ることが重要である。

その分析を行うため、2ちゃんねるの掲示板のカテゴリのうち、日常的に触れることが多く、議論が起きやすいと仮定した、15種類のカテゴリのスレッドの3つずつ、計45つを対象として抽出した。

抽出を行った結果、スレッドを消費する日数が多かったのは4日であり、次いで3日、5日が多いという結果になった。そこで、スレッドを3日から5日にかけて消費しているものに着目し、分析を行った。

スレッド内での関係性についてはある程度理解することができた。スレッド内では決まって議論が発生するわけではなく、あくまでも「一部」で議論が行われており、それを見つけ出す方法を検討する必要があると考えられる。

ジャンルでは、主に社会や生活、政治などの分野では短い期間でやりとりが行われていた。

身近になく自分の言動や思想が反映されにくい「企業」や「政治」に対して普段から思っているが口には出せず、このような場で発散するために不平不満という議論は深化していき、ある意味での議論の発展となっているのではないだろうかと考えられる。

対して、趣味や娯楽という側面が大きいジャンルに対しては自分の趣味を相手に押し付けず、他者との共有を主としているために議論は深化せず、発散していくのではないかと考えられる。

(指導教員 芳鐘冬樹)